

ケアリング・マインド

—安らぎと癒しの場としての「床」を中心に—

澤田 愛子

富山医科薬科大学医学部看護学科臨床看護学講座

要 旨

最近、ケアリングに社会的な関心が集まっている。ことに、複雑にして機械化した医療の中で、本来のケア業務をなす時間が奪われつつある看護関係者によって注目されるようになってきた。その背景には精神的な安らぎを求め始めた社会の意識の変化がある。ケアリングとは、対象を深く気づかいつつその利益を願って行動していくことであり、看護行為そのものであるともいえる。ケアリング・マインドとはそうした行為をなす心のあり方である。ケアリングとはまさに聖書が記す小さい人々への「隣人愛」の実践にも通じる概念であるが、その手段の一つは、「もてなし」の実践において示されている。そしてその「もてなし」のプロセスの中心には、「床」の存在があった。この「床」はまた、看護業務においても最重要な部分であるため、その深い意味を考察することは、看護におけるケアリングの意味を再確認することにもなるのである。本稿では、「床」が象徴する「もてなし」の具体的意味を主として聖書と『戒律』において考察し、わが国における看護の文化ないしはケアリング文化の再建を主張した。

キーワード

ケアリング・マインド、小さい人々への愛の実践、ホスピタリティー、床、ケアリング文化の再建

序：「ケアリング」への関心の高まり

超高齢社会を迎えて、看護職に対する社会的需要がますます高くなっている。それに対して、ひと頃の深刻な看護師不足は山を越えたものの、供給される看護職員の数社会の需要を満たすまでにはいたっていない。毎年、多数の新卒者は出すものの、同様に多数の看護師達が職場を離れていくからである。

看護師達が離職する最大の理由は、オーバーワークでも低賃金でもないと言われている。それは、仕事の内容への不満なのである。延命医学の発達に伴った治療内容の高度化は、各種の医療機器の操作等への忙殺によって、看護師から本来の専門領域、すなわち患者の療養上の世話（ケア）を果

たす時間を奪いつつある。しかも、独自の看護行為には、それにふさわしい報酬が支払われることがないといった現在の矛盾した診療報酬制度も手伝って、日常業務はますます患者との人間的な触れ合いから看護師達を遠ざけている。仕事に生きがいを感じることができれば、多少オーバーワークであっても、低賃金であっても、職務を継続したいという意味が看護師達にあることは、各種の調査結果から明らかとなっている。

最近、「ケアリング」(caring)なる語や概念に社会的関心が集まり、看護師達も研究課題にするようになってきた。それは直接的には、看護や医療を取り巻くこうした状況に対する看護関係者の危機意識から出てきているように思われる。機械化された臨床現場でバタバタと時間に追われ、

「人間」そのものが見えにくくなっている現実から、本来の人間の触れ合いを取り戻そうとする彼等または彼女達の憧憬にも似た願望がその底にあるのではないだろうか。さらに、この動きを後押ししている力として、ここ十年くらいの日本社会の変化もあるようである。この社会は、これまで人間の内面を直視することなく、ひたすら走り続けてきたのだが、その果てに、数々のひずみを生じるにいたった。そして今、その反省から医療界にあっては、「全人的医療」という概念も強調され始めている。また、人間の生と死の問題への関心から現在、終末期医療や生命倫理も注目されるようになってきた。看護関係者のケアリングへの関心は、こうした社会の変化とも無関係ではない。それは一方で、殺伐として乾き切った社会に、看護の力で人間的な潤いや絆を回復しようとする運動であるとも受け取れるのである。

本稿では、このケアリングと看護について考察してみるが、特にその中で、「もてなし」という視点における「床」の意味に注目してみるつもりである。なぜなら「床」こそ看護行為の最重要な部分であり、これによって、ケアリングの深い意味を再確認できるのではないかと考えたからである。聖書とベネディクトゥスの『戒律』にその思想的背景を探った上で、最後にケアリング・マインドに裏付けられた「ケアリング文化」の再建を主張してみたいと考えている。

ケアリングと看護

オックスフォード英語辞典によると、ケア (care) には大まかに分類して、2つの意味があるという。1つは、caring about で表現される、人やその状態に対する態度や感情、心の状態を示すもので、2つ目は、caring for で示されるスキルの行使を意味するものである。そして、ジェッカー (Jecker, N.S.) とセルフ (Self, D.J.) によれば、看護行為 (nursing) はこの2つの意味を伴った時にはじめて完全なものとされるのである¹⁾。つまり対象となる人々に深く想いを巡らすことなくして、真の看護行為は生じないであろうし、また、深く想いを巡らすのみで実行が伴わなければ、相

手の状態は何も改善されることはない。看護行為 (nursing) が本来、caring about と caring for の意味からなっているとしたら、看護は caring そのもの、つまり、相手をひたすら気遣いつつその利益のために行動することであるといってもよく、ケアリング・マインド (caring mind) とは、そうしたケアリングをなすための基本となる心のあり方であると考えられる。

ところで、ケアと対比される語としてキュア (cure) がある。今ではキュアは「治療」と訳され、ケアと対立した概念のように扱われている。しかし、キュア (cure) は、オックスフォード英語辞典によれば、もとはラテン語の curare よりきており、それは care for (めんどろをみる) や take care of (気遣う) を意味していたという。したがって、そこには今日用いられているような、ケアと切りはなされた「治療」の意味はほとんどなかった。すべてはケアリングが基本にあったのである。たとえこれを「治療」と訳しても、よく考えれば、そこに献身的なケアリングがなければ、人は決して癒されることはないだろう。こうした意味からすると、ケアリングは看護のみならず、医療行為そのものの基本理念であるということもできる。黒岩はこのような視点で、キュアとケアを包括した「癒し」を医療の新たな概念として提唱していた²⁾。

しかし、ここではケアリングを広く医療というよりも、看護の視点に絞って見ていきたい。

看護の起源と愛の実践

看護行為はもともとドメスティックな行為として出発した。家庭内に、あるいは同じ集落の中に、病んでいたり負傷した人がいれば、やむにやまれぬ同情心をもってある者は援助の手を差し伸べた。これが看護の始まりであったと多数の看護史家達は述べている。そこには、単に同族の人々の生命を守りたいという意味以外に、人類にアブリオリに備わった同情心（あるいは共感）の発露があったように思われる。それが後に、自然な形で宗教的な理念と結合し、その中で、意味内容を強化させて発展していったと言えるだろう。

具体的にみてケアリングは、例えば、聖書に記されている「愛の実践」や、さらに、仏教の慈悲の行為とも相通じる概念であった。だから、それは主としてキリスト教の隣人愛や仏教の菩薩業の一環として、熱心な信仰者の手によって広められ、救療活動へと開花していったのは言うまでもない。看護や医療の歴史をみれば一目瞭然である。

こうした理念の依って立つ思想を考察すれば、「ケアリング」のより具体的な内容が明らかになってくることだろう。今からそれをみてみたい。ここでは、とくに聖書における「隣人愛」の思想を分析してみよう。

「小さい人々」への愛と「もてなし」

キリスト教の中心理念は言うまでもなく、「隣人愛」であるのだが、これは新約のみならず、旧約聖書も含めた聖書全体を貫く重要な理念である。ところで、ここでいう「隣人」とは誰のことをいうのだろうか。ルカによる福音書の10章には有名な「良きサマリア人のたとえ」が出てくるのだが、この中で、「隣人」についての明確な説明がなされている。聖書における「隣人」とは、物理的な遠近を指すことばではない。このたとえは、強盗に襲われ傷ついた旅人を見知らぬ通りがかりのサマリア人が助け、宿屋に連れて行って介抱したという話であるが（ルカ10の25-37）、「隣人」とはまさに「隣人になる」ことができる性質の概念であるという。端的に言って、聖書的な「隣人愛」とは、ここで示されているように、具体的な他者、とくに「小さい人々」への愛の実践を表すことばである。

しかし、さらに説明が必要である。この場合、「小さい人々」とはいったい誰のことをいっているのだろうか。「小さい人々」は聖書の中では、必ずしも子供であるとか体つきの小さい人のことを意味しているのではない。そうではなく、それは助けを必要としているすべての人々、とりわけ、貧者、病人、障害者、旅人、苦悩する人、蔑視されている人々等、とくに弱い立場にいる人間を指し示すことばとして用いられているのである。子供も助けを必要としているので、もちろん「小

い人」の範疇には入るのだが、それだけを指しているのではないということを銘記しておきたい。「隣人愛」とは、とくにこうした人々に対する具体的な実践の愛なのである。聖書的な愛とは、机上で論じるあこがれの中の抽象的な愛ではなく、始めから終わりまで「実践の愛」である。

そして愛の実践の具体的な方法の一つが、「もてなし」(hospitium)の行為であったのだ。聖書にはこの「もてなし」を示す描写が、新約、旧約を問わずに頻回に出てくる。

「もてなし」と日本語で訳されている語の語源はラテン語の hospitium である。この語から hospice や hospital, hotel 等の語が生まれているのをみれば、hospitium がいかに奥行きのある思想であるかがよくわかるであろう。ところで、聖書の中で描写されている「もてなし」のプロセスには一定のパターンがあることがわかる。つまり、旧約、新約聖書を問わず、「もてなし」が実践される時には、おおよそ次のような経路を辿っているのである。つまり、具体的な他者、ことに「小さい人」がまず、ある人の家に招かれ、食事を与えられる。そして彼（女）はそこで休息を取り、日々の疲れや労苦を癒されて、再び元気になって出発するのである。招かれる人物は時に、その地方の名士であるとか、使徒であったり予言者の場合もあるのだが、多くは「小さい人々」であった。そして、この「もてなし」による休息と癒しの中心には「床」(bed)が存在していたのである。

看護における「床」の意味

ここで、「床」が「もてなし」のプロセスの中心に存在していたとすると、それは実践の愛の具体例である hospitium のシンボリックな意味として浮かび上がってくることになる。つまり、聖書において、「床」は単に寝る場所ではなく、「安らぎと癒し」を具現化する場として存在したのである。

一方、その「床」は看護行為においても中心的な場を占めていることは言うまでもない。「床」は病人が一日の大半を過ごし、睡眠を取り病を癒す場であるからである。その意味で、床はナイティ

ンゲルも言うように、看護職務の最重要な部分として存在する³⁾。したがって、今、「床」について背景と思想を考察することは、看護行為と直接つながる「ケアリング」の意味を再確認することにもなるだろう。もちろん、「床」がケアリングのすべてであると言っているのではない。しかし、それにはケアリングの象徴としての意味があるのである。

それでは、これから「床」の背景にある意味を「安らぎと癒しの場」という視点のもとに、聖書と修道会規則の中に探してみよう。そうすることによって、「もてなし」と深く関連するケアリングの重要性についてもわかるだろう。

聖書の中にみる「床」

聖書⁴⁾の中にみる「床」のシンボリックな意味を、これから、①『『もてなし』の実践の中で』という視点と、②「休息と回復、死と復活」という視点の二方向から考えてみたい。

①「もてなし」の実践の中で

隣人愛の実践例としての「もてなし」は聖書のさまざまな箇所、その記述を目にすることができる。ここでは、そのごく一部を引用しつつ、「床」のシンボリックな意味を考えてみたい。

<創世記24の30-31>

「・・・彼が行ってみると、確かに泉のほとりのらくだのそばにその人が立っていた。そこでラバンはいった、『おいでください。主に祝福されたお方、なぜ町の外に立っておられるのですか。わたしが泊まりになる部屋もらくだの休む場所も整えました』」

この話はアブラハムが年寄りのしもべに、自分の故郷に行って、ひとりの女性であるリベカを、息子イサクの嫁にするために、連れてくるように頼んだところから始まる。アブラハムの命令を受けたしもべはアラム・ナハライムに行く。その泉（井戸）の傍らに着いた時、そのリベカがやってくる。アブラハムは前もって、「水を飲ませてください」と頼んだ時に飲ませてくれる女性がい

たら、それがリベカだと教えておいた。しもべに会ったりリベカは、「わたしの家に来て泊まってください」と誘うも、彼が遠慮したために、家に帰って兄であるラバンにそのことを告げる。すると、ラバンが今度はその泉のところにやってきて、しもべに「部屋も準備しましたから、さあ、来て泊まってください」と誘ったのである。

現代と異なって、交通手段が何もなく、ラクダ以外に頼るすべのなかった当時、砂漠の旅がどれほど困難なものであったか、想像できないほどであろう。だから、その時代に「旅人」であるということは、そのまま「小さい人々」のカテゴリーに入った。さらに渇きの問題もあった。イスラエルを旅行したことのある人であれば、乾燥しきった大地を歩き続けることがどんなものであるかわかるだろう。だから、しもべは到着すると、まっ先に泉に立ち寄ったのである。こうしてやさしい誘いを受け、アブラハムのしもべはリベカの家泊めてもらうことになった。そこには暖かい部屋が既に用意されていた。しもべは兄妹の心からの歓待を受け、その夜、心地よい床で安らかな眠りに就いたことであろう。

<士師記19-9>

『日もかげってきて夕方です。もう一晩お泊まりください。ここに泊まってくつろぎ、明朝出かけることにしてはどうですか』

これは、ユダにあるベツレヘムの一人の父親と娘の話である。この娘はレビ人の側女になっていたが、ある日、父親の家に帰ってしまう。レビ人も追いかけてそこにやってきた。そして幾晩も泊まって食べたり飲んだりした。ある日、彼が出発しようとする、娘の父親はそのレビ人に、「もう日が暮れようとしているので、もう一晩泊まっていかれてはどうですか」と言ったのである。この娘と、彼女が側女として一緒に暮らしていたレビ人は必ずしも仲がよくなかったようであるが、娘の父親はそんな彼も歓待して家に泊め、食べたり飲んだりさせながらもてなしたのである。そして、彼が出発しようとした夕方、こうしたことを放って引き止めた。現代と違い、当時の夜の旅がどれほど危険であったかを理解するなら、この

父親の行為は愛情に溢れたものであったといえる。レビ人はこのような暖かい気持ちに答えて、心地よい床でまた一晚を過ごしたことであろう。

<列王記下4の9-10>

「彼女は夫にいった。・・・『あの方は聖なる神の人であることがわかりました。あの方のために階上に壁で囲った小さな部屋を作り、寝台と机と椅子と燭台を備えましょう。おいでの時はそこに入ってくださいませ』」

これは予言者エリシャの話である。ある日、エリシャはシュネムに出かけていった。そこに一人の裕福な婦人がいて、彼を引き止め食事を勧めた。その後、彼はそこを通るたびに立ち寄って食事をするようになる。そしてある日のこと、その婦人は夫に上記のように語ったのである。

当時、ユダヤの予言者は貧しく、困苦に満ちた生活の中で多くの人々に教を説いていた。その生活は旅から旅への生活であった。こうして旅をしながら心身ともに疲れ果てた彼の身に、この婦人の好意がどれほど力を与えたことか計り知れない。始めのうち、彼女は食事のみを提供していた。しかし、回数を重ねるうちに、寝台と机と燭台を備えた部屋まで用意して、エリシャをもてなすようになったのである。予言者はこの心づくしの部屋で、その床に身を横たえて疲れを癒し、再び活力を得て出発したことだろう。

<イザヤ書58-7>

「飢えた人にあなたのパンを裂き与え、さ迷う貧しい人を家に招き入れ、裸の人に会えば衣を着せかけ、同胞に助けを惜しまないこと」

これはイザヤ書の一節である。詩の形態で教が述べ伝えられているこの書は、読む者の心に深く迫るものがある。ここでは、「小さい人々」への愛の実践の具体例が明確に示されている。家に招き入れられた「さ迷う貧しい人」は、暖かい食事を与えられ、気持ちのよい床で心ゆくまで安らぎ憩ったことであろう。こうして、彼等や彼女等は癒され、再び元気になって出ていくのである。

<使徒言行録16-15>

「そして彼女も家族の者もバプテスマを受けたが、その時、『わたしが主を信じる者だと思いでしたら、どうぞわたしの家に来てお泊まりください』とってわたし達を招待し・・・」

これはパウロがテモテを連れて、マケドニアのフィリッピへ宣教旅行に行った時の話である。彼等は安息日に町の門を出て、祈りの場所であった川岸へ行った。そこには既に他の使徒達が集まっていた。そして彼等の周りを話を聞くためにやって来た婦人達を取り囲んでいた。その中にリディアという信心深い女性もいたが、彼女と家族はそこでバプテスマ（洗礼）を受け、パウロ達に上記のように語りかけたのである。

パウロは迫害の中で、非常に困難な旅を続けながら宣教していた。だから、リディアのような人々の「もてなし」がなければ、彼の宣教も途中で挫折していたかもしれない。迫害と過酷な旅で疲労困憊状態にあった人間パウロは、この信心深い女性の家で、心から安らぎ、疲れを取り、活力を回復させたことであろう。

<ルカによる福音書24-29>

「わたし達と一緒に泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」

これは有名なエンマウスの弟子達のエピソードである。イエスが十字架上で処刑された後、3日目によみがえったことを多くの弟子は知らなかった。そのため彼等はそれぞれ故郷に帰っていかうとしていたのである。ある日のこと、弟子の一部が故郷に帰るためにエンマウスの野を歩いていた。その時見知らぬ旅人が近づいてきて、彼等に話しかけながらついて行く。彼等が宿に到着した時には既に夕暮れ時であった。そこで彼等はこの旅人に、一緒にここに泊まらないかと誘ったのである。士師記でもみたように、当時、日が暮れてからも旅を続けることは、危険きわまりないことであったからである。そこで、旅人はこの誘いに喜んで応じる。そして彼等と一緒に夕食の席につき、旅人がパンを裂いた時、彼等の目が開かれて、この旅人が復活したイエスであったとわかるのである。しかし、その瞬間、旅人の姿は見えなくなってし

まった。

このエピソードにも「もてなし」の精神の発露がある。当時の旅の困難さを考えれば、既述したように、旅人はみな「小さい人」であるともいえる。弟子達はここで、師の教えを実践し、その「小さい人」をもてなそうとしたのである。そして、その人が実はイエスご自身だったというわけである。イエスは福音書の他の箇所でもこうも言っている。「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたことは、ことごとくわたしにしてくれたことなのである」（マタイ25-40）と。

＜ルカによる福音書10の33-34＞

「・・・ところが旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄ってきて傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した」

これは既述した「良きサマリア人のたとえ」の中の一節である。「隣人を愛せよ」の隣人とは誰かと聞かれたイエスが、たとえをもって教えようとしたのである。追い剥ぎに襲われて半殺しにあった人を、通りかかった見知らぬサマリア人が助ける。一方、当時のエリートであった律法学者や祭司達は見て見ぬふりをして通り過ぎてしまった。だから、ここでその負傷者の隣人となったのは、ユダヤ人とは日頃仲のよくなかったサマリア人であったというわけである。「隣人」となってくれたその人に、宿屋で介抱された憐れな負傷者は、暖かな床で傷ばかりか心までも癒される体験をしたことだろう。これはたとえ話であるが、十分このように想像できる。

＜ローマの信徒への手紙12-13＞

「聖なる者達の貧しさを自分のものとして彼等を助け、旅人をもてなすように努めなさい」

これは、パウロがローマにいる信徒達に宛てた手紙の一節である。ここにおいて、パウロは具体的な愛の実践を勧め、例えば、当時は大変な労苦を伴った旅人を「もてなし」の実践愛で助けなさいと教え諭しているのである。

以上、旧約および新約聖書から若干の具体例を

引きながら、聖書における隣人愛の一手段としての「もてなし」について概観してみた。こうした引用を通して、先に述べた「もてなし」のプロセスが多少とも明らかになったことであろう。そしてそのプロセスの中には、たとえ明示されていなくても、「床」が常に存在していたのである。これらの一連の具体的な行為にケアリングの本質である気遣い(caring about)が読み取れる。「もてなし」の実践(caring for)はこの気遣いを基にして生まれたものであった。

②眠り：休息と回復・死と復活

このように、「もてなし」の中心に位置する床は、言うまでもなく、多くの場合、眠り(安らぎ)の場所でもある。人間の休息は信頼と依託の徴として聖書においても讃えられている。

「平和のうちに身を横たえ、わたしは眠ります。主よ、あなただけが確かにわたしをここに住まわせてくださるのです」(詩編4-9)

そして心にやましきところのない人々はぐっすり眠りに就くことができるという。

「働く者の眠りは快い。満腹していても、飢えていても、金持ちは食べ飽きていて眠れない」(コヘレットの言葉5-11)

また、一方で、眠りは夜の闇に包まれて死の象りとなることもある。したがって、眠りが人祖の罪から生じた死の状態(注1)を意味するなら、そこから覚醒することは、悔い改めと生命への復帰ともなる。これこそ、死と復活の象りである。惰眠を貪るエルサレムに神は、「目覚めよ、目覚めよ、立ち上がれ、エルサレム」(イザヤ書51-17)と諭す。聖なる都エルサレムのこうした覚醒は、言わば真の復活である。塵の中に横たわる者が目覚めるからである。

病者が床の中で、もてなしの愛によって信頼のうちに眠りに就き、時には病魔(夜の闇)と戦いながら覚醒する時、彼等や彼女等は癒しを体験するのであり、死からの復活の希望の中で新たな力を獲得する。この時、病者は単に肉体的に癒されるばかりか、もっと深い次元での魂の癒しも体験することになる。それはとりもなおさず、聖書的に見れば、ケアの担い手の中に現存する神の癒し

のみ業であると言ってよい。

そしてこの休息と癒しの連鎖は、彼等または彼女等をして、魂の約束の地、すなわち雅歌の花嫁がそのために息絶えることを願ったほどの決定的な憩いの中に、いつかは入ることを熱望させるのである。

ベネディクトウス『戒律』にみる「床」と「もてなし」

聖書における愛の実践の具体例である「もてなし」は、ベネディクトウス『戒律』(Regula Santi Benedicti)の中で開花したと言ってもよい。話はここからヨーロッパの中世初期に飛ぶ。

ヨーロッパの中世紀は、言うまでもなく、修道院文化が開花した時代である。当時、修道院は祈りの拠点であるばかりか、学問、芸術、医療の中心地でもあった。この時代の多くの医療施設は修道院に付設されたものであり、そこにおける修道者達の活躍は、まさに聖書的な「もてなし」の精神を「小さい人々」に具現化するものであったのだ。

こうした修道生活の基盤を作ったのがベネディクトウス(Benedictus)であった。ヌルシアで貴族の子として誕生したこの人は、ローマでの遊学時代に世の道德的腐敗に心を痛め、やがてスピアコの森の隠遁生活に入ったと言われている。そして仲間とともに、福音的理想を実現するために修道会を創設したのである。やがてベネディクトウスの会はモンテ・カッシーノ山上に修道院を建設し、さらにヨーロッパ各地へと広がっていった⁵⁾。

『戒律』⁶⁾(注2)とは、「聞け子よ、師の教訓に心の耳を傾けよ」(Obsculta, o fili, praecepta magistri, et inclina aurem cordis tui)ということばで始まる緒言と全73章からなる規則書であるが、「もてなし」や「床」との関連でみていくと、とくに、36章の「病んでいる修友」(DE INFIRMIS FRATRIBUS)と53章の「来客の接待」(DE HOSPITIBUS SUSCIPIENDIS)が重要である。これらの章はケアリング・マインドで溢れている。

①『戒律』の36章(DE INFIRMIS FRATRIBUS)

『戒律』の36章では、「病んでいる修友」(修友とは仲間の修道士の意味)に関する教訓が述べられている。若干、引用してみよう。

“Infirmorum cura ante omnia et super omnia adhibenda est, ut sicut revera Christo ita eis serviatur, quia ipse dixit: *Infirmitas fui, et visitastis me, et: Quod fecistis uni de his minimis, mihi fecistis.*” (36: 1-3)

(和訳:「何よりも先に、何ごとにも越えて、病人の世話をし、キリストご自身に対してのように奉仕すべきである。キリストは御みずから『わたしが病気をした時、あなた方はわたしを見舞ってくれた』また、『あなた方がこのもっとも小さい兄弟のひとりにしてくれたことは、ことごとくわたしにしてくれたことだ』といわれたからである」)

ここではまず、病人への世話は、あたかもキリストに対する奉仕であるかのようにするべきであると記されている。なぜなら、病人の内にはましますのはキリストご自身に他ならないからである。それは聖書の、「わたしが病気をした時、あなた方はわたしを見舞ってくれた」ということばによって明らかである。

したがって、世話を担当する者としては、神を畏敬し勤勉で注意深い修友が選ばれるべきであった。そして病人には別の住まいが許される等の特別待遇が与えられるのである。

“Quibus fratribus infirmis sit cella super se deputata et servitor timens Deum et diligens ac sollicitus.” (36-7)

(和訳:「病人には別の住まいを与え、神を畏敬し勤勉で注意深い修友を指名して、その世話にあたらせる」)

そして世話係は、病人に手の届かぬところがないように注意を払いつつ忍耐をもって仕える必要がある。さらに、修道院長(アッバス)は病人が病室係からなおざりにされて苦しむことがないように、最大の配慮を注がねばならないのである。

ここには、現代でも通用する看護に当たる者の心がまえと要求される資質が述べられていて興味

深い。つまり、真のケアリング・マインドが看護する者達に求められているのである。聖書における愛とは、具体的で実践を伴うものでなければならなかったが、厳しい修道生活においても、病人等弱い人々への愛の実践がどれほど細やかで人間性を考慮したものであったか、これらの記述を読んでわかるであろう。「床」に関して言えば、「病人には別の住まいを与え」とある。つまり、ふだん修道士が休む大部屋ではなく、病室が与えられたことがわかる。この病室で、「床」にも特別な配慮が施されたことは十分に理解できるのである。

②『戒律』の53章 (DE HOSPITIBUS SUSCIPI- ENDIS)

『戒律』の53章には、「来客の接待」に関する教訓が述べられているが、とくにこの章は「もてなし」の具体的なあり方を述べた最も輝ける章である。幾つかの箇所を引用してみよう。

“Omnes supervenientes hospites tamquam Christus suscipiantur, quia ipse dicturus est: *Hospis fui et suscepistis me. Et omnibus congruus honor exhibeantur, maxime domesticis fidei et peregrinis.*” (53の1-2)

(和訳:「すべての来客をキリストご自身としてもてなさなければならない。なぜならキリストおん自ら、いつの日か、『わたしが旅をしていた時に、あなた方は宿らせてくれた』と仰せられるはずであるからである。すべての来客、とりわけ信仰において兄弟である人々および旅行者に対して、それぞれにかなった奉仕をしなければならない」)

ここには、これまで聖書において見てきた具体的な「もてなし」の精神の発露がある。

“Ut ergo nuntiatus fuerit hospis, occurratur ei a priore vel a fratribus cum omni officio caritatis . . .” (53-3)

(和訳:「それ故、来客の知らせがあったならば、長上者と修友は急いで迎え、有らん限りの愛徳をもって奉仕する」)

現代のホスピスにもつながる修道院文化におけるホスピスとは、まさにこのようなものであったのだ。とくにハンディを負った「小さい人々」を迎える時には、最大限の配慮が必要であると『戒

律』は述べる。

“Pauperum et peregrinorum maxime susceptioni cura sollicite exhibeatur, quia in ipsis magis Christus suscipitur; nam divitum terror ipse sibi exigit honorem”. (53-15)

(和訳:「貧困者と旅行者を迎える場合には、最大の配慮を払わねばならない。なぜなら、キリストを迎えるのは、主として彼等においてであるからである。富貴の来客に対しては、畏れの念から自然に尊敬を払うことができるものである」)

そしてこのように迎え入れた客人に対しては、来客用の宿舎で、十分な寝具を与え、何一つ不自由のないように世話をし、もてなさなければならないのである。

“Item et cellam hospitium habeat adsignatam frater cuius animam timor Dei possidet; ubi sint lecti strati sufficienter. Et domus Dei a sapientibus et sapienter amministretur.” (53の21-22)

(和訳:「来客用の宿舎もまた、神に対する畏敬の念のあつい修友にまかせる。ここには必要に応じて、十分な寝具を備え、神の家が賢明な人々によって、賢明に管理されるようにしなければならない」)

この「来客用の宿舎」とは、まさに「もてなしの家」であるホスピスなのだが、『戒律』の精神を引き継ぐ修道会では、今もとくに訪問者(来客)の接待を重視する伝統が生きている。そうした修道会の一つに、厳律シトー会(通称ではトラピスト修道会)がある。

ここで、筆者が北海道のトラピスチヌ修道院の客舎に泊めてもらった時の体験を少し述べておきたい。

もう15年くらい前になるだろうか。クリスマスが近づいた雪の降る寒い日だった。筆者は函館市街を一望できるトラピスチヌ修道院の客舎を訪問した。そしてそこで5日間ほどを過ごしたのであるが、初めて部屋に通された時のことを忘れることができない。既に部屋は程よく暖房がしてあった。あたりは静寂が支配していた。その部屋に入った時、その温かさとともに、それまで硬くからみついてきた心の糸がほぐれていくような感覚に

捕われた。あらゆるものが溶けていくように、体と心に安らぎが染み込んできたのである。滞在期間中、筆者は修道院の手作りの料理でもてなされ、夜はよくメイクしてあったベッドで憩った。あの時の感覚を今も忘れることができない。そして客舎にいとまを告げた時、自分が知らない間に癒されていたのに気づいたのである。その時、筆者は「もてなしの家」としてのホスピスがいかなる場所であるのか、また、ケアリング・マインドなる精神がいかなるものなのかを身をもって悟ったのである。あの日、トラピスチヌの心地よいベッドに身を置いて以来、「安らぎと癒しの場としての床」の概念は、筆者の脳裏を駆け巡る主要なテーマの一つとなったのである。

「臨床」の真の意味を求めて—まとめにかえて

以上のように、弱き者、困難に遭遇する人々等、「小さい人々」への実践的愛を、「もてなし」を通して説く聖書の思想は、ベネディクトゥス『戒律』の中で花開き、ホスピス等の豊かな修道院文化をもたらし続けた。その文化を通して、西洋の看護史に名を連ねる無数の英雄的男女が生み出され、やがてケアリングの土壌はナイティンゲールから現代へと引き継がれていった。

近代になって、自然科学を基盤にした医学が勝利を収めてからもなお、西洋の社会と医療風土の中には、ケアリング・マインドなる精神が染み込み続けている。それに対して、わが国の医療はその近代化の中で、それを切り取った形で発展していった。それが結果として看護の軽視をもたらした。さらに、機械化の波の中で、触れ合いの希薄な今日の看護状況を生み出してしまったのである。その結果がどうなったのかは、始めに述べた通りである。

我が国でも、古代から中世期にかけては、仏教を基盤として看護の文化が開花した一時期もあったのだ。それがいつの間にか衰退し、世の中はますますでいった。そして、幾多の試練を経て近代化を成し遂げた時も、この国では心の世界は忘れられがちであった。

しかし今日、冒頭で述べたように、確かに時代の波は変化している。戦後一時期の繁栄を支えた経済は崩壊し、これまで通用したシステムも機能しようとはしなくなっている。だが、一方で、崩壊やすさみの向こうに、新しい光を求めて叫ぶ人々の声も聞こえ始めているのである。

今後、この社会はどこに向かうべきなのだろうか。とくに看護はどこに目線を向けていくべきなのだろうか。答えは明確である。それには、本稿で考察した「もてなし」の精神を看護実践の中で実施していくこと以外にはないだろう。そしてまずは、「床」のシンボリックな意味を踏まえて、臨床（＝「床」に臨む）の場を「安らぎと癒しの場」へと再構築していくことにあるのだ。これは換言すれば、この国におけるケアリング（看護）文化の再建であり、それが精神文化の再建をももたらししていくものと信じたい。そして今、この役割を担えるのは、ケアリングの意味に関心を持ち始めた看護師達を除いては他にいないだろう。今ようやく看護の時代すなわちケアリングの時代が到来した。

- (注1) 人祖アダムとエワが神に背いて罪を犯してから、神罰として死が人間の世界にもたらされたことと聖書には記されている（創世記3章）。
(注2) 『戒律』の日本語訳は北海道上磯のトラピスト修道院所蔵のものを引用した。

引用文献

- 1) Jecker NS, Self DJ: Separating care and cure: an analysis of historical and contemporary images of nursing and medicine. *The Journal of Medicine and Philosophy* 16(3): 302-303, 1991.
- 2) 黒岩卓夫: 病と癒し. 宗教学と医療, 黒岩卓夫編, p167, 弘文堂, 東京, 1992.
- 3) Fナイチンゲール (湯楨ます訳): 看護覚え書. P132, 現代社, 東京, 1968.
- 4) 共同訳聖書実行委員会編: 聖書新共同訳. 日本聖書協会, 東京, 1988.
- 5) 澤田愛子: 末期医療からみたいのち. P158,

朱鷺書房, 大坂, 1996.

6) SAINT BENOIT : Regle (edition du centenaire) - Texte Latin Version Française par

H. Rochats, Introduction et Notes par E. Manning. Les editions la Documentation Cistercienne, Rochefort, 1980.

Caring mind

-A consideration on “bed” as a place of ease and healing-

Aiko SAWADA

School of Nursing, Toyama Medical and Pharmaceutical University

Abstract

In these days, 'caring' becomes one of the great interests in Japanese society. Particularly, nurses who are losing the time to care for their patients in the mechanical and complicated medical settings, are interested in this issue. As this background, there is a change of mind in our society which begins to search for the peace of mind. Caring means to care about someone deeply and act for his or her benefits, and it is equivalent to nursing itself. 'Caring mind' is an attitude to care about some people. It is also closely connected with the idea of neighborly love to the little people in the Bible. An example of the Biblical neighborly love is practice of hospitality. In most cases, there are beds in the center of the Biblical hospitality. This bed is also in the center of nursing care. Therefore, by discussing on the profound meaning of it, we can understand the 'caring' in nursing job clearly. In this article, what hospitality symbolized by bed means will be discussed through the Bible and the “Rule” of Saint Benedictine, then finally, reconstruction of nursing or caring culture will be stressed as a conclusion.

Key words

caring mind, practice of love to the little people, hospitality, bed,
reconstruction of caring culture